

論集後記

今年の論集も無事、刊行の運びとなりました。これも原稿のとりまとめや、版面作りと、手のかかる作業にあたってくれた院生の皆さんのおかげです。この論集は、早稲田大学大学院の教育学研究科の院生たちで作っており、まだ修士に入ってから一年目の院生の論もあれば、この三月に修士課程を修了する院生たちの修士論文の一部という論もあります。

執筆者の中には、今回はじめて論文を公にするという院生もあろうかと思えます。学術論文の執筆は、限られた字数の中で、そしてまた守らねばならない様々な制約のもとで、自分の考えを形にしていける作業です。それまでの自分の書いてきた文章や考えてきたことを、この窮屈な形に集約していく作業は、はじめての場合かなり苦労するかと思えます。何をどこまで説明すればよいのか、どういう根拠をどれだけ引けばよいのか、そういう暗黙の知識は論文作成の大きな部分になっていて、それがわかっていないとかなり「痛い」論文になってしまう。

最初は長さもかなりの制約になってくるかもしれませんが、自身のことを振り返ってみると、ともかく論全体が長くなってしまい、どうすれば短くできるかよく苦労したことが記憶に残っています。今考えてみれば、いかに無駄で必要のない部分、簡略に説明できる部分がたくさんあったかがわかるのですが、その頃はせっかく調べたことだから、あるいは面白い点が見つかったから、という理由で、論の主要な筋に不要なことまでもあれこれと

詰め込んでしまっていたようです。

とはいえ、やはり限られた言葉、限られた形の中で、十分な根拠資料と自身の見解をクリアにまとめていく作業は、ただだからだと制約なく書くよりも、はるかにいろいろなことを気づかせてくれます。何が削れて、何が削れないか、どの資料が削れて、どの資料がどうしても必要か、そういうぎりぎりの取捨選択が、自分自身の思考自体の筋道をよりはっきりさせてくれますし、論の展開そのものも同じくよく見えてくるように思います。

今、私は日本を離れて、イタリアで教えはじめたところです。一時間半の授業を週に四回行っています。クラスは一人程度で、中国、イスラエル、台湾、ドイツと、様々な国の大学から来た学生たちで、日本語は学んでいないので、英語での授業となります。基本的には読書や出版文化の東西比較、といったテーマです。

イタリアの大学で教えるのははじめてですし、日本語を学んでいない学生に英語で授業をするのははじめてです。そうです、こちらで私もはじめてのことをどきどきしながらやっているわけです。学生の呼び方、出席の取り方、質問の仕方、課題や発表の応答、何もかもが新鮮で、はじめて自分が教え始めたときのことを思い出します。

そして当然、ここでは様々な制約の中で教えなくてはなりません。こちらの授業の形式、評価方法もかなり細かく制約があります。また、外国語で教える場合、自分自身の語学能力や、語彙も大きな制約になります。その制約の中で、これまで自分が研究してきた内容を説明しなくてはなりません。相手が納得いくように、ちゃんとした根拠や資料をあげながら、わかりやすく。

それは作業としては大変で、準備もかなりの時間をとられるのですが、ただその一方で気づかされること

も多々あります。今まで自分が日本で説明していたことをこちらで説明しようとする、これまでやってきた自分の説明の不十分なところ、自分の論の曖昧なところがかなり見つかるのです。新たな制約の中で何かを考えた、表現したりすることが、それまでの自分の思考を見直す手がかりになるわけです。これはとても刺激的で、わくわくする新鮮な体験です。

学術論文という形式は、一見堅苦しく表現しづらい形式に思えるかもしれませんが、その制約を通して、執筆者の方たちが見いだし得たものが、多くの人々に刺激を与えてくれることを願っています。

(和田 敦彦)